

Allegro assai
Baritone Solo

Freu - de, Freu - de, Freu - de, schö - ner

Freu - de! Freu - de!

Allegro assai

Ob. Clar. dolce Fag. Archi pizz. Ob. I. Clar. I. Archi pizz. pp

Göt - ter - fun - ken, Toch - ter aus E - r - de. Wir be - tre - ten feu - er - trun - ken,

Himm - li - sche dein Hei - lig - tum! Die ne - au - ber bin - den wie - der, was die Mo - de

streng ge - teilt, al - le Men - schen wer - den Brü - der, wo dein sanf - ter Flü - gel weit.

Legni cresc. p

60 春日井市制施行60周年

2003春日井市民第九演奏会

とき 2003.12.7 SUN 午後3時開演 春日井市民会館

主催 春日井市、(財)かすが市民文化財団、春日井市教育委員会、2003春日井市民第九演奏会実行委員会

共催 春日井市交響楽団、春日井第九合唱団

後援 中部大学、中日新聞社

ごあいさつ



春日井市長 鷺飼 一郎

年末の恒例行事となりました春日井市民第九演奏会によるごそおいでくださいました。今年も残すところ後一ヶ月、皆様それぞれに思い出深い一年であったことと思います。師走のひとつ、「第九」の調べを聴きながら新たな年に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

今年で第11回目となりますこの演奏会は、平成5年12月、市制施行50周年記念事業のひとつとして開催して以来、文字どおり、市民による手づくりの演奏会として親しまれてまいりました。冬の訪れとともに全国各地で第九演奏会が開かれますが、わがまち春日井の「第九」のように、合唱から管弦楽までほとんどが市民で構成される演奏会は、他の都市にも余り例がございません。魅力ある市民文化の創造をまちづくりの大きな柱の一つとして、市民の皆様の主体的な文化活動を支援しております本市にとりましては、誠に心強く喜ばしいことです。

さて、今年、本市は市制施行60周年を迎えました。この記念すべき年に「第九」は11年目を迎えます。新たな飛躍を目指す春日井第九合唱団と、ますます演奏に磨きのかかる春日井市交響楽団に加え、ドイツからお招きしました若き指揮者、ヨッヘム・ホッホシュテンバッハ氏が個性豊かなソリストを率いて新鮮な味わいを創出いたします。その素晴らしい音楽的才能によって「春日井の第九」のさらなる魅力が引き出されるものと期待しております。どうぞごゆっくりお楽しみください。



2003春日井市民第九演奏会実行委員会会長
中部大学学監 三浦 昌夫

みなさまには、おそろいで「春日井市民第九演奏会」においでいただきありがとうございます。毎年、12月に一年の幸せを感謝して、来年はすべての人にとって良い年でありますようにと願いながら、この人類愛を讃えた「第九」を歌ってまいりました。

指揮者に国際的にご活躍のヨッヘム・ホッホシュテンバッハさんをお招きすることができ、今年もまた「世界に開かれた春日井の第九」となりました。ソリストには、昨年好評の並河寿美、児玉祐子、小貫岩夫、片桐直樹のみなさまに再度おいでいただきました。オーケストラの春日井市交響楽団も加藤完二先生のご指導をえてますます腕を上げ、合唱団は吉川朗先生のご熱意のもと、なお一層美しい歌声をきかせます。今年の「第九」は、例年以上に充実した「第九」となるものと存じます。

多くの市民のみなさまがこうして一堂に会して、「歓喜は神々の火花である」と高らかに歌い上げ、また、共に「第九」を聴くとき、感動の喜びはすべての人々の心をつなぐことなのでしょう。そして、これからもまた、恒例の「第九」によって、春日井市は喜びと信頼と希望と勇気に満ちた人々の街へと拓けていくことなのでしょう。

さあ、明日を信じて、会場のみなさまも一緒に、「われらは兄弟、世界は一つ」と「春日井賛歌」を大声で歌おうではありませんか。

プログラム

Program

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン作曲
LUDWIG VAN BEETHOVEN (1770-1827)

交響曲第9番 二短調 作品125 「合唱つき」 Symphony No.9 in d-minor op.125 "Choral"

- 第1楽章 アレグロ マ ノン トロッポ, ウン ポコ マエストーソ
1mov. Allegro ma non troppo, un poco maestoso
- 第2楽章 モルト ヴィヴァーチェ
2mov. Molto vivace
- 第3楽章 アダージョ モルト エ カンタービレ
3mov. Adagio molt e cantabile
- 第4楽章 フィナーレ, プレスト-アレグロ アッサイ-レシタティーヴォ-アレグロ アッサイ
4mov. Finale, Presto - Allegro assai - Rezitativo - Allegro assai

指揮者

Conductor

ヨッヘム・ホッホシュテンバッハ

Jochem Hochstenbach



ソプラノ Soprano
並河 寿美
Namikawa, Hisami

テノール Tenor
小貫 岩夫
Onuki, Iwao

アルト Alto
児玉 祐子
Kodama, Yuko

バス Bass
片桐 直樹
Katagiri, Naoki



Music director

音楽監督 都築正道
Tsudzuki, Masamichi

Sub conductor

練習指揮 加藤完二
Kato, Kanji

Chorus conductor

合唱指揮 吉川 朗
Yoshikawa, Akira



管弦楽 春日井市交響楽団
KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA



合唱 春日井第九合唱団
KASUGAI CHORUS OF THE 9TH SYMPHONY

出演者紹介



指揮者 ヨッヘム・ホッフシュテンバッハ

指揮者でピアニスト。1970年オランダのティバークに生まれました。1984年からユトレヒトの音楽院でピアノを学び多くの賞を得て卒業。1992年スペインやドイツやチェコのマスタークラスで学ぶ。1994年からウィーンの学生オーケストラの指揮をする。オーストリア、イタリア、日本、フィンランド、エストリア、ハンガリーなどで演奏会を開く。1997年ウィーン音楽院をディプロマを得て終了。1997年よりリンツの州立歌劇場でコレペティートルを務める。1999年に同劇場の音楽監督に昇格。以来、《フィガロの結婚》など120の歌劇作品を上演。

ソプラノ 並河 寿美

大阪音楽大学音楽学部卒業。専攻科・大学院オペラ研究室修了。門田泰子、田原祥一郎の両氏に師事。こうべ市民音楽祭大賞。全日本学生音楽コンクール大阪大会第1位。「フィガロの結婚」の伯爵夫人、「コシ・ファン・トゥッテ」のフィオルディリージとドラベッラ、「カルメン」のミカエラ、「カヴァレリア・ルスティカーナ」のサントウツァなど多数に出演。さらに、ルーマニアのトゥルグ・ムレシュ市で開催された『冬の音楽祭』に『カヴァレリア・ルスティカーナ』（演奏会形式）のサントウツァで出演。「第九」をはじめ、モーツァルトの「レクイエム」「戴冠式ミサ」「ミサ・プレヴィス」。フォーレの「レクイエム」、オルフの「カルミナ・ブラーナ」ほかのソリストをつとめる。現在、二期会会員。垂水区音楽協会、西宮音楽協会、神戸音楽家協会各会員。兵庫県立西宮高等学校音楽科非常勤講師。大阪城南女子短期大学非常勤講師。昨年9月には、ヴェルディの「ドン・カルロ」のエリザベッタ役で出演。



アルト 児玉 祐子

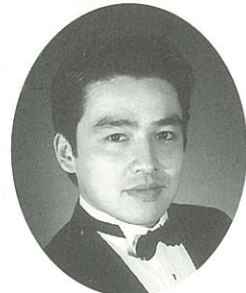
大阪音楽大学音楽学部声楽学科卒業。1985年に関西二期会でオペラデビュー以降、オペラ歌手として様々な役柄にオリジナリティー溢れる的確な個性を演じ分け好評を博す。「コシ・ファン・トゥッテ」のドラベッラ、「ラインの黄金・ワルキューレ」のフリッカ、「ナクソス島のアリアドネ」の作曲家、「こうもり」のオルロフスキーなど、レ



パートリーは30役に及び、特に1996年「カルメン」のタイトルロール・カルメン役では、高い歌唱力と優美な舞台姿で観客を魅了した。またソリストとしては「第九」「メサイア」「レクイエム」などをはじめとして現代作品の初演や各種演奏会でも幅広く演奏活動を続けている。1999年ドイツ歌曲による「演連コンサートOSAKA・児玉祐子メゾ・ソプラノリサイタル」を開催。その業績により平成11年度大阪文化祭奨励賞を受賞。現在・京都女子大学・大阪女子学園高等学校非常勤講師、関西二期会会員・理事、日本シューベルト協会会員、日本演奏連盟会員。

バス 片桐 直樹

京都教育大学音楽科卒業。東京芸術大学大学院オペラ科修了。1988年関西二期会オペラ公演《ドン・ジョヴァンニ》で、レポレツコ役でデビュー。歌唱、演技ともに高い評価を得る。関西二期会を中心に《愛の妙薬》《ラインの黄金》《フィガロの結婚》《蝶々夫人》《ラ・ボエーム》など、数々のオペラ公演に出演し、明るく気品のある声質と端正な音楽性、存在感のある演技力で好評を博す。年末のベートーヴェン《第九》のバリトン・ソロとして各方面で活躍している他、バッハの《マタイ受難曲》をはじめ、ヘンデルの《メサイア》、ヴェルディ《レクイエム》など、バロックから現代に至るまで、オラトリオや宗教曲などのソリストとして、著名指揮者やオーケストラとの共演も多い。先の「市民オペラ・フェスタ in Kasugai: オペラってなに？」(8月25日)に《魔弾の射手》のカスバル役で出場。春日井デビューを成功で飾る。福島慶子、喜多村彪、木川田澄、中山悌一、原田茂生の各氏に師事。関西二期会会員。京都音楽家クラブ会員。相愛大学講師。



テノール 小貫 岩夫

北海道小樽市出身。同志社大学神学部を卒業後、大阪音楽大学首席卒業。オペラ研修所第11期修了。1998年度文化庁派遣芸術家在外研修員として1年間ミラノに留学。飯塚新人音楽コンクール大賞(文部大臣奨励賞他)、第5回コンセル・マロニエ21最優秀賞受賞。音大在学中の1995年に抜擢され、「魔笛」のタミーノでテオ・アダムと共演しデ

ビュー(堺シティオペラ)。この成功により翌年同役でケムニッツ市立歌劇場(ドイツ)に招聘出演。日生劇場、東京室内歌劇場、びわ湖ホールなどに出演。2002年1月には三枝成彰作曲オペラ「忠臣蔵」に岡野金右衛門役で出演し新国立劇場へ主役デビューを飾った。「第九」の他、「メサイア」、「レクイエム」(ヴェルディ、モーツァルト)などの宗教曲も歌っている。指揮者では若杉弘や大野和士をはじめとする多くの指揮者と共演。林誠、故疋田生次郎、松本美和子、V・テッラノーヴァ、R・ネーグリの各氏に師事。二期会、日伊音楽協会、堺シティオペラ各会員



音楽監督 都築 正道

1940年名古屋生まれ。名古屋大学文学部美学卒。関西学院大学大学院博士課程修了。「ワグナー研究」で文学博士。現在、中部大学教授。春日井市交響楽団音楽監督。愛環音楽連盟理事長。朝日新聞音楽評担当。文化フォーラム春日井・企画運営アドバイザー。春日井文化懇話会会長。(財)かすが市民文化財団理事「オペラ・トーク」「ハイビジョン・オペラシアター」など、講演会やTVや雑誌でオペラの解説。「名古屋オペラ・サロン」主宰。主著『楽劇:音と言葉の美学』(音楽之友社)。



コンサートマスター 練習指揮 加藤 完二

ヴァイオリンを尾島綾子・東儀幸各氏に師事。在学中より指揮を学び、卒業後関西二期会等で朝比奈隆氏他の副指揮を務めた。大阪音楽大学でのオペラ指揮を皮切りに、各地でオーケストラやオペラを指揮。特にアマチュアオーケストラのトレーニングは好評。ルーマニアの「第2回ディヌ・ニコレスク国際指揮者コンクール」入賞及び審査員特別賞受賞。6年後同国でオペラ「カヴァレリア・ルスティカーナ」他を客演指揮し、海外でも評判を得る。伊丹シティフィルハーモニー管弦楽団監督。クレフ室内管弦楽団主宰。



合唱指揮 吉川 朗

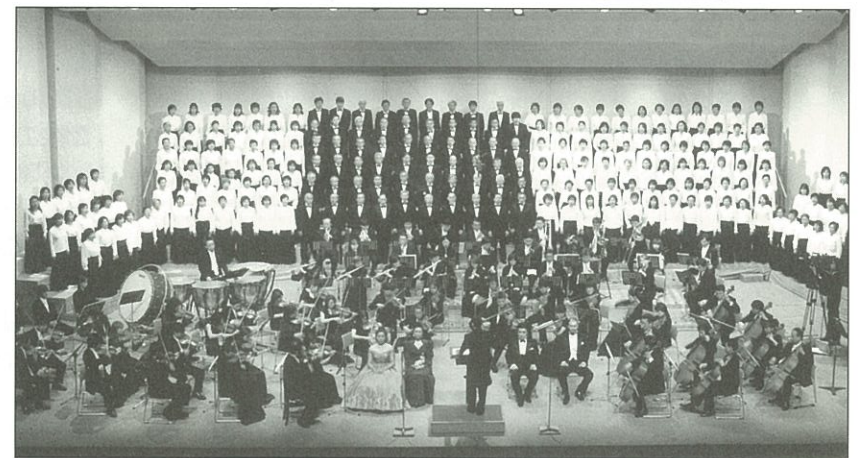
愛知教育大学音楽科卒業。同大学院(作曲)修了。第九指導は1987年の半田第九に始まり、ナゴヤシティ管弦楽団(現セントラル交響楽団)、一宮第九を歌う会、小牧第九合唱団など。NHKナゴヤニューサウンズオーケストラ常任指揮者。

ピアノ伴奏(合唱団) 竹内 理恵



オーケストラ 春日井市交響楽団

市民オケである春日井市交響楽団は、第九の演奏会を春日井でも開きたいという市民の要請から生まれました。それを受けて、「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として、市内の音楽愛好家を中心に、1990年(平成2年)11月に創立されました。愛称『カボ』(KAPO)は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カボ」(capo 頭・先頭に立つ者)の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。今年は、3月に「春日井音楽コンクール受賞者記念演奏会」をはじめ、9月に伊丹シティフィルハーモニー管弦楽団と共演の「オーケストラってなに？」やドイツから4人のソリストを招いての《フィガロの結婚》上演、「春日井市私立幼稚園協議会教員研修会」などにも出演、文化フォーラム春日井での「団内演奏会」など活躍の場を上げています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる60名。私たちにとって、最大の喜びは、一人でも多くのおみなさまに演奏会においていただき、クラシック音楽を好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。これからも、さらに、市民のおみなさまに親しまれ、愛されるカボとして、市民音楽活動をつづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。(団長・花村浩克)



合唱 春日井第九合唱団

平成5年12月の春日井市制50周年は、市民の手によるベートーヴェンの「第九演奏会」の春日井初演によって盛大に祝われました。この演奏会を記念して作られたのが、「春日井第九合唱団」です。以後、毎年12月には、新しく募集した市民も加わって、220名を越すメンバーが常に新鮮なベートーヴェンの「第九交響曲」を歌い継いできています。創立以来、ベテランの吉川朗先生をはじめ、多くの優れた音楽家のご指導で、技術的にも、音楽的にも、完成度の高い「第九」演奏を心がけています。平成7年からは、年末の「第九」の本練習に入る前に、特別練習として数々の合唱作品に挑戦しています。本年7月5日(土)には、文化フォーラム春日井の交流アトリウムにおいて「つたえたい 日本のこころ」と題して演奏会をいたしました。また、愛環音楽連盟にも加入して、毎年の音楽祭に参加し、2005年愛知万博には連盟主催の演奏会にも出演する予定です。今年第11回になる「第九」は、ドイツのヨッヘム・ホッフシュテンバッハさんの指揮で、さらに美しいベルカントな演奏が出来るものと張り切っています。ご期待下さい。(団長・山田伊素子)



この世で見つけた幸せ

ー ベートーヴェンからのメッセージ ー

異端の交響曲 ベートーヴェン (1770-1827) の「第九交響曲」(1824)は、終楽章に4人のソリストと合唱が入った異端の交響曲です。「なぜ異端か」と言えば、「シンフォニー」(交響曲)は、もともとオペラを演奏するときに開演前にオーケストラが行う「音合わせ」(sym=合わせる・fonia=音)であって、器楽曲のための音楽に限定されていたからです。それなのに「なぜ交響曲の終楽章に声楽を加えたのか」といえば、この「第九番」が彼の最後の交響曲であり、その終楽章は彼の一連の交響曲の最終楽章でもあるからです。音楽史を少しのぞいただけでも、最後の交響曲の最後の楽章が、結果的にそうだったとしても、その作曲家の従来の交響曲の構成とは全く違った異質なものである例は意外に多いのです。ブラームスの「第四番」の終楽章(パッサカリア)、ブルックナーの「第九番」の終楽章(は完成されなかったので「テ・デウム」)、チャイコフスキーの『悲愴』の終楽章(アダージョ・ラメントーソ)、マーラーの「第九番」の終楽章(アダージョ=フィナーレ)と並べれば、単なる偶然であるとしても、少々気になるところです。たとえ無意識であっても、交響曲の絶筆となることを予感した作曲家が、その最後の作品の最後の楽章だけ、極めて前例のない破格なものに仕上げたことは、私たちになにか特別な、例えばフロイト的な感慨を

もたらします。それは、ひょっとすると、後世の私たちに向けられた作曲家からの直接の「遺言」(マニフェスト)なのではなからうかと思えるからです。

もっと心楽しく喜びにみちた調べを歌おう 特に、このベートーヴェンの「第九番」の終楽章こそ、正にベートーヴェンから私たちへ届けられた「メッセージ」であるといっていいでしょう。例えば、その良い例として、終楽章の長い序奏のあと、テキストとして用いられたシラーの詩が歌い込まれる前に、バリトン・ソロがまるで宣言文を読むように朗唱する箇所が挙げられます。「おおわが仲間たちよ、このような調べではなく、もっと心楽しく喜びにみちた調べを歌おうではないか」と訴えるこの冒頭での呼びかけは、シラーの詩を始める前にベートーヴェン自身が書き記した序詞です。この個人的な発言は、言葉を持つ終楽章がベートーヴェンの「マニフェスト」(宣言文)であることをはっきりと現わしているといえましょう。

シラーの『歓喜の歌』 ベートーヴェンが最後の交響曲の最後の楽章にテキストとして用いたのは、8節からなるシラーの詩『歓喜に寄せる頌歌(しょうか)』なのですが、その中から人類愛を力強く賛えた詩句を自由に抜粋して再構成したものです。しかし、ベートーヴェンは、この「第九交響曲」の完成に先立つ31年も前に、一度、シラーのこの詩に作曲をしようと試みたことがありました。1792年(22歳)、その時彼はボン大学の聴講生でした。シラーの詩の初版時の9節全部に歌を付け、通作歌曲として独立した合唱曲にしようと考えていたようです。しかし、「命名祝日」序曲(作品115)にこの合唱曲の流用を思いついたものの、結局、『歓喜に寄せる頌歌』の音楽化の企ては実現しませんでした。

難解な現代詩と前衛音楽 その後も長い間、ベートーヴェンがこだわり続けてきたシラーの詩は、やっとのことで最後の交響曲に生を受けることとなります。1824年5月7日ケルトナート・ア劇場で初演されたときには、それが時代をはるかに先取りしていたために、すべての人から理解され祝福された誕生とはなりません。当時の人々にとってこの詩は、大衆になじみ深い宗教詩でも聖句でも古典詩でもない、彼らと同時代の詩人フリードリッヒ・シラー(1759-1805)の啓蒙思想やフリーメイソンの信念を語る現代詩でありました。このことが、当時のウィーンの人々に、この曲を「難解」なものと感じさせた原因のひとつでもあります。しかし、それ以上に彼らが強い戸惑いを覚えたのは、絶対音楽である交響曲に声楽を加えたベートーヴェンの前衛的な音楽技法

でした。ベートーヴェン自身も、「この試みは単なる暴挙にすぎず、完全に間違いであって、いつか純粋音楽の終楽章を書こう」と弟子のツェルニーに語ったということです。

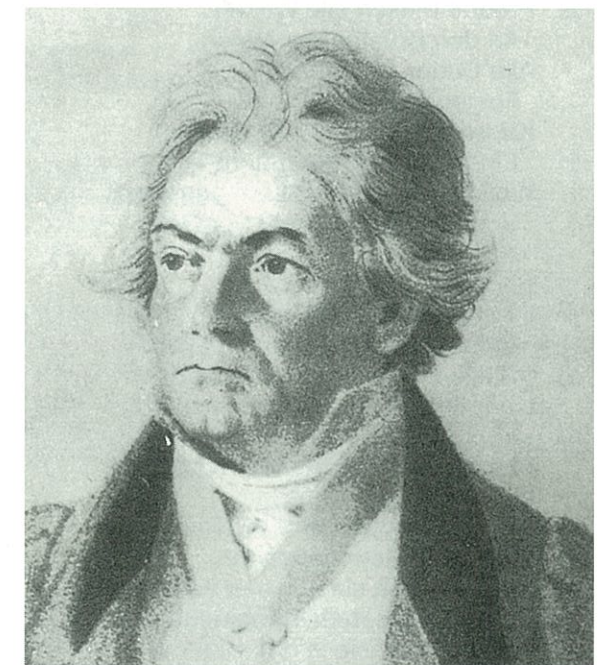
歓喜は神々の火花である しかし、ベートーヴェンが、この暴挙をどれほど真剣に反省していたかは疑問です。結局、この改作案は実現されずに終わりました。私は、このエピソードにもかかわらず、「ベートーヴェンは、最後の交響曲が理解されないままに終わることを恐れず、あくまでも言葉によるメッセージの必要性を主張し、最後までその主張を放棄しなかったのだ」と思います。この曲には何か、人間として、作曲家として、社会に対して果敢をばならぬベートーヴェンの「義務の念」といったものが強く感じられるからです。ここで私たちは、次の挿話を思い出します。ある人が、作曲家のシェーンベルクに訊ねました。「どういう訳でベートーヴェンは、「第九交響曲」を乱雑だといわれながらも、書きつづけたのですか」。彼は答えました。「答は一つしか知らない。言わねばならぬことがあったからだ」。正にその通りで、彼には言わねばならぬことがあったのです。冒頭の1節「歓喜は神々の火花である」がそれです。ここでの「歓喜」は、私たちが日ごろ思っているような、食べたり飲んだり遊んだりの「快楽」や「欲望」の結果としての「歓喜」のことではありません。詩をよく読んで見ますと、「欲望はウジ虫にくれてやれ」という一節もあり、個人的な快楽や欲望をはっきり否定しています。

共通体験から生まれる感動 シラーの言う「歓喜」とは、個人を離れて理想的な人類愛をめざす、極めて精神的な満足感や充実感を言うのでしょうか。一人の友と真の友人になった人、一人の優しい女性を勝ち得た人、その人の心が自分のものだと言える人—こう言った人々こそ「歓喜」を知った人たちです。この歓びの感情を知った人たちだけが、兄弟となるのです。鉄と鉄がガスや電気のバーナーで何千度にも熱せられると、どろどろと溶けだしてお互いがくっつくように、普段は別々の興味や考えや心をもつ人たちでも、「子どもが生まれた」「大学に合格した」「ノーベル文学賞をもらった」となるとみんなが肩を抱き合って大喜びをします。なんであっても、なにか共通の喜びがあれば、それが火花となってすべての人の心を溶かし、思いを一つに結びつけるのです。すなわち、「歓喜」は「共通体験から生まれる感動」のことだと言っていいでしょう。本日のみなさまのように、1900年代最後の年を記念するために、家族そろって「第九」を聴くのもこの「歓喜」を求めてのことだと思われます。

理想的な人類愛 さらに、「歓喜は、また、楽園からやってきた乙女だ。神々の火花によって、私たちが火のように酔うならば、そこで初めて歓喜の聖域に踏み込むことができるのだ」とシラーは歌います。「人類の心はもともと一つであったのだ。それが戦争や飢饉や恐慌や独裁といった時の流れで、いままでの友が新たな敵となり、仲間が仲間を殺したり嘲ったり軽蔑したりするようになったのだ」と。それほど激しく憎み合い、もう修復が効かなくなった関係であっても、「歓喜はまた再び私たちの心をつなぎ合わせてくれる。これを魔法の力と言わずして何といおうか!」とシラーは人類の心の底に流れる歓喜の力を力説しているのです。もちろん、これはベートーヴェンのマニフェストでもありません。すなわち、個人を離れて理想的な人類愛をめざす、極めて精神的な満足感や充実感のことです。さらに、彼は言います—「歓喜とはなにか。それは、この世で幸せを見つけたことをいうのだ、例えば、真の友を得た人、優しい女性と結婚した人、だれかに確かに愛されていると感じる人こそ、歓喜を知る人なのだ。もしあなたが、このどれも知らないのならば、私たちの仲間になることはできない。涙を流して去っていきなさい」と。

さあ、私たちはこのシラーとベートーヴェンのメッセージに対してどう答えればいいのか。それを、本日の2003春日井市民の第九を聴きながら一緒に考えてみることにいたしましょう。

(音楽監督: 都築正道)



'An die Freude' 対訳

内藤克彦 訳

An die Freude

喜びに

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum.
5 Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

喜びよ、美しい神々の火花よ、
至福の園の娘よ、
われらは炎に酔いしれて、
天上のものよ、きみの聖所に歩み入る。
きみの魔力は
流俗の厳しく分離したものを、再び結び合わせ、
きみのやさしい翼の休むところ、
すべての人が兄弟となる。

Chor
Seid umschlungen, Millionen!
10 Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder— überm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen.

合唱
抱き合え、百千万の人々よ!
このくちづけを全世界に!
兄弟たちよ—あの星空の上には
一人の慈父が住み給うに違いないのだ。

Wem der große Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
15 Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja — wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
20 Weinend sich aus diesem Bund!

一人の友の友となる
大きな幸に恵まれた者、
やさしい女性をかち得た者は、
声を合わせて歡呼せよ!
そうだ—ただ一つの魂をでも
この地上で自分のものと呼べる者は!
それをなし得なかった者は、
泣きながらこのまどいから消え去るがいい!

Chor
Was den großen Ring bewohnt,
Huldige der Sympathie!
Zu den Sternen leitet sie,
Wo der Unbekannte thronet.

合唱
この大地球に住む者は、
共感を信奉せよ!
共感が、われらを星々へ、
あの未知なる存在の玉座へ導いてゆくのだ。

25 Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
30 Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

喜びを、万物は
自然の乳房から飲み、
善きものも悪きものも、みな、喜びの
ばらの道を追い求めてゆく。
喜びは、くちづけとぶどう酒と、
死の試練を経た友をわれらに授けた。
快楽は、虫けらに与えられ、
神の前に立つのは、智天使だ。

Chor
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
35 Such' ihn überm Sternenzelt,
Über Sternen muß er wohnen.

合唱
ひざまずくか、きみたちは、百千万の人々よ。
創造主を予感するか、世界よ。
星空の上に、神を求めよ、
星々の上に、神は住み給うに違いないのだ。

Freude heißt die starke Feder
In der ewigen Natur.
Freude, Freude treibt die Räder
40 In der großen Weltenuhr.
Blumen lockt sie aus den Keimen,
Sonnen aus dem Firmament,
Sphären rollt sie in den Räumen,
Die des Sehers Rohr nicht kennt.

喜びは、久遠の自然の
強いばねだ。
喜びが、巨大な宇宙時計の
歯車を回し、
花々をつぼみの中から、
星々を大空の中からいざない出し、
天球を、観測者の筒の見知らぬ空間で
回転させているのだ。

Chor
45 Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

合唱
星々が天空の壮麗な平原を
飛翔してゆくごとく、朗らかに、
兄弟たちよ、きみたちの道を進め、
喜び勇んで勝利に向かう英雄のごとく。

Aus der Wahrheit Feuerspiegel
50 Lächelt sie den Forscher an;
Zu der Tugend steilem Hügel
Leitet sie des Dulders Bahn.
Auf des Glaubens Sonnenberge
Sieht man ihre Fahnen wehn,
55 Durch den Riß gesprengter Särge
Sie im Chor der Engel stehn.

真理の炎の鏡の中から
喜びは探究者にほほえみかける。
美徳のけわしい丘の上へ
喜びは忍耐者の道を導く。
信仰の光かがやく山頂には
喜びの旗がひるがえり、
打ち砕かれた棺の裂け目からは、
喜びが、天使たちの合唱の中に立つのが見える。

Chor
Duldet mutig, Millionen!
Duldet für die bess're Welt!
Droben überm Sternenzelt
60 Wird ein großer Gott belohnen.

合唱
勇気をふるって耐え忍べ、百千万の人々よ!
よりよい世界のために耐え忍べ!
あの星空のかなたで
偉大な神が報い給うのだ。

Göttern kann man nicht vergelten,
Schön ist's, ihnen gleich zu sein.
Gram und Armut soll sich melden,
Mit den Frohen sich erfreuen.
65 Groll und Rache sei vergessen,
Unserm Todfeind sei verziehn;
Keine Träne soll ihn pressen,
Keine Reue nage ihn.

神々に人は報いることはできぬが、
神々に等しくあることはすばらしい。
悲しい人も貧しい人も名乗り出て、
喜ぶ人と喜びを共にせよ。
恨みと復讐は水に流そう、
われらの不倶戴天の敵を許そう。
涙が彼の胸をふさぎ、
悔恨が彼の心をさいなむことのないように。

Chor
Unser Schuldbuch sei vernichtet!
70 Ausgesöhnt die ganze Welt!
Brüder—überm Sternenzelt
Richtet Gott, wie wir gerichtet.

合唱
われらの黒表は破棄しよう!
全世界は和解せよ!
兄弟たちよ—あの星空の上で、
われらが裁くごとくに、神は裁き給うのだ。

Freude sprudelt in Pokalen,
In der Traube goldnem Blut
75 Trinken Sanftmut Kannibalen,
Die Verzweiflung Heldenmut—
Brüder, fliegt von euren Sitzen,
Wenn der volle Römer kreist,
Laßt den Schaum zum Himmel spritzen:
80 Dieses Glas dem guten Geist!

喜びは、ワイングラスの中に泡立ち、
ぶどうの黄金の血と共に
蛮人は柔和を、
絶望は英雄的勇気を飲む—
兄弟たちよ、並々と注いだグラスがめぐり来れば、
きみたちの席から飛び立ちて、
泡を天に向かって飛び散らせ、
グラスをあつた善い霊に向かって上げよ!

Chor
Den der Sterne Wirbel loben,
Den des Seraphs Hymne preist,
Dieses Glas dem guten Geist
Überm Sternenzelt dort oben!

合唱
星々の渦巻きがたたえ、
熾天使の賛歌がほめたたえる、
あの星空のかなたの
善い霊に、グラスを上げよ!

85 Festen Mut in schwerem Leiden,
Hülfe, wo die Unschuld weint,
Ewigkeit geschwornen Eiden,
Wahrheit gegen Freund und Feind,
Männerstolz vor Königsthronen—
90 Brüder, gält es Gut und Blut—
Dem Verdienste seine Kronen,
Untergang der Lügenbrut!

重い悩みには不拔の勇気を、
罪なくして泣くところには救いを、
固い誓いには永遠を、
友と敵には真実を、
玉座の前では男子の誇りを—
兄弟たちよ、たとえ財産と生命に関わろうとも—
いさおしには栄冠を、
いつわりのやからには没落を!

Chor
Schließt den heil'gen Zirkel dichter,
Schwört bei diesem goldnen Wein,
95 Dem Gelübde treu zu sein,
Schwört es bei dem Stermenrichter!

合唱
この神聖な輪をより固く結び、
この黄金のワインにかけて、
誓約に忠実なることを誓え、
あの星空の審判者にかけて誓え!

みんなで歌おう、春日井賛歌を…

< 歓喜の歌 >

作詞 ● なかにし礼

1、あ い こ そ か ん き に み ち
び く ひ ー か り さ え ぎ る
く な ん を こ え て す す ー ま
ん か ん き の い た ー だ き
ふ み ー し め た と き わ ー れ
ら は き ょ う だ ー い せ か い は ひ ー と
つ か ん き の い た ー だ き ふ み ー
し め た と き わ ー れ ら は き ょ う
だ ー い せ か い は ひ ー と つ

1. 愛こそ歓喜にみちびく光
さえぎる苦難を越えて進まん
歓喜の頂いただき踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ
歓喜の頂いただき踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ

2. 気けだか高き乙女を勝ち得たものよ
手を取り歓呼かんこの叫びをあげよ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ